

総合的な学習の時間を中核としたカリキュラム・ マネジメントに関する研究

- 学習指導要領の検討および事例分析を通して -

楊 川

1. 問題の設定

本稿は中央教育審議会答申および学習指導要領の内容の検討を通して、カリキュラム・マネジメントの重要性を確認するとともに、総合的な学習の時間との関連性を論じ、そのうえで、事例校への調査を通して、当該事例校の総合的な学習の時間（以下、「総合学習」と略す。）を中核としたカリキュラム・マネジメントの実態を明らかにすることを目的とする。

周知のように、学習指導要領とは、教育理念の実現に向けて必要となる教育課程の基準を大綱的に定めるものである。平成29年現在、各学校で編成・実施されている教育課程は、現行の学習指導要領（中学校の場合、平成20年3月、平成22年11月一部改正）を基準にしている。一方、社会情勢の変化、学問研究の発展等に合わせて、学習指導要領は約10年おきに改訂が行われており、平成29年3月には新学習指導要領が公示されている。そして、この新しい学習指導要領では、新たな概念として「カリキュラム・マネジメント」が登場し、各学校がこのカリキュラム・マネジメントを確立する重要性が提起された。平成27年8月26日に示された教育課程企画特別部会「論点整理」では、カリキュラム・マネジメントの定義や重要性などが以下のように説明されている。

各学校には、学習指導要領等を受け止めつつ、子供たちの姿や地域の実情等を踏まえて、各学校が設定する教育目標を実現するために、学習指導要領等に基づきどのような教育課程を編成し、どのようにそれを実施・評価し改善していくのかという「カリキュラム・マネジメント」の確立が求められる。

これを具体的に実現するため、「教科横断的な視点から教育活動の改善を行っていくことや、学校全体としての取組を通じて、教科等や学年を越えた組織運営の改善を行っていくことが求められ」ることを指摘するとともに、従前の教育課程の在り方と「カリキュラム・マネジメント」との違いなどを以下のように三つの側面から説明している（下線部筆者）。

- ①各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。
- ②教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCA サイクルを確立すること。
- ③教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

以上の背景に基づき、平成29年3月に制定された「中学校学習指導要領」の総則「第1 中学校教育の基本と教育課程の役割」では、以下のように述べられている。

4 各学校においては、生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実

施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと(以下「カリキュラム・マネジメント」という。)に努めるものとする。

このように、新学習指導要領において「カリキュラム・マネジメント」の概念が「論点整理」を踏まえる形で具体的に提起されている。

また、総則「第5 学校運営上の留意事項」においては、下記のように、カリキュラム・マネジメントを行っていくために、学校長をはじめとする教職員組織の体制づくりの大切さが強調されている。

ア 各学校においては、校長の方針の下に、校務分掌に基づき教職員が適切に役割を分担しつつ、相互に連携しながら、各学校の特色を生かしたカリキュラム・マネジメントを行うよう努めるものとする。また、各学校が行う学校評価については、教育課程の編成、実施、改善が教育活動や学校運営の中核となることを踏まえつつ、カリキュラム・マネジメントと関連付けながら実施するよう留意するものとする。

以上のように、カリキュラム・マネジメントにおいては教職員の連携体制が不可欠なものとされており、また学校評価はカリキュラム・マネジメントと関連付けられることが想定されている。学校を改善するツールである学校評価をカリキュラム・マネジメントと関連付けるということは、カリキュラムを通した学校の改善という視点を学校が持たなければならないということであろう。このような学校改善に資するカリキュラムのためには具体的な体制や手立ての開発が必要となる。それでは、学校ではいかにして教科横断的な視点で組み立て、教職員体制を整備し、カリキュラム・マネジメントを実現しているのだろうか。以下ではまず、カリキュラム・マネジメントの鍵とされている総合的な

学習の時間の価値について検討し、そのうえで事例研究を通して、カリキュラム・マネジメントの実際と、その課題について明らかにしていくことにする。

2. 総合的な学習の時間とカリキュラム・マネジメント

平成28年12月21日の中教審「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」では、「総合的な学習の時間は、学校が地域や学校、児童生徒の実態等に応じて、横断的・総合的な学習など創意工夫を生かした教育活動を行うこと」とし、総合学習の成果を上げ、総合学習の重要性を提示している。一方、総合学習をめぐる課題に関しては、「総合的な学習の時間を通してどのような資質・能力を育成するのかということや、総合的な学習の時間」と各教科等との関連を明らかにすることについては学校により差があると述べた上で、「これまで以上に総合的な学習の時間と各教科等の相互の関わりを意識しながら、学校全体で育てたい資質・能力に対応したカリキュラム・マネジメントが行われるようにすること」という。

このように総合学習とカリキュラム・マネジメントとの関連付けが述べられ、さらに総合学習が「各学校におけるカリキュラム・マネジメントの鍵」であることが明示された。

筆者がかつて指摘したように、この位置付けは、実は総合学習が導入された当初からねらいとされていた。すなわち、総合学習は各教科、道徳、特別活動といった編成領域と単に学習内容、方法レベルでの学びの性質が異なることのみならず、特に教科の教え込みという行為がもたらした学びの空疎化を背景として、それらの編成領域を統合し、児童・生徒にとって意味ある学びとすることが期待されていたのである。児童・生徒にとって意味ある学びとすることとは、受動的学びから、主体的学びにすることによって他ならない。児童・生徒を学校教育の主役として位置付け、児童・生徒の視点からカリキュラムを

構成するという視点の転換、そして必然的に求められる教育課程の有機性の向上(＝マネジメント)が総合学習の使命であった。そのことが改めて明示されたということは、これまで以上に総合学習を教育課程の中核としなければならないことを強調したということである(楊2017)。

そして、以上のように改めて強調された総合学習の重要性に対し、教員養成を担う教職課程はさらにその質的向上が求められている。平成27年12月の中教審答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」では、教員としての基礎的な資質能力を育むため科目区分の大幅な変更がなされるとともに、教育内容として「教育課程の意義及び編成の方法(カリキュラム・マネジメントを含む。)(下線部筆者)や、「総合的な学習の時間の指導法」が新規に設定されている。教員養成段階においてカリキュラム・マネジメントと総合学習の双方より充実すべきことが改革の方向性として示されたと言えるだろう(楊2017)。

以上のことから、カリキュラム・マネジメントにおいて中核となる総合学習をいかに仕組むかが、その成否を担うと言えるだろう。このような視点を踏まえつつ、次項では事例調査の結果を述べる。

3. 事例調査の概要

A校はB自治体にある私立中学校である。B自治体は19政令指定都市の一つであり、平成29年現在、国立中学校1校、県立中学校1校、公立中学校62校、私立中学校8校(計72校)を持つ自治体である⁽¹⁾。本研究において、事例校を選定した理由は以下による。図1のように、A校では公立高校(トップ校・上位校)、A校と同法人の私立高校(難関クラス・S特クラス)への合格者数が大幅に増加している。A校では学習面だけではなく、生活習慣の形成を重視する指導を行っており、在校生の出席皆勤率も大幅に増加している。A校副校長によれば、A校へ入学した生徒は「先生が熱心に指導している」、「学力が伸

びることを期待できる」、「行きたい高校を自由に選択できる」、「豊かな人間性が育まれることを期待できる」、「体験学習や学校行事が充実している」、「『いじめ』のない良好な人間関係が築かれることが期待できる」などの保護者の考え方に基づくことや、公立学校の教育になじまないことなどでA校を選択したという。実際、上記の保護者等に期待されるもの（例えば、学力、人間性の育成への期待や、体験学習・学校行事の充実度への関心など）はA校の教育課程の特徴でもあり、とくに多様な「体験学習」（総合学習の位置付け）の効果が大きいという。

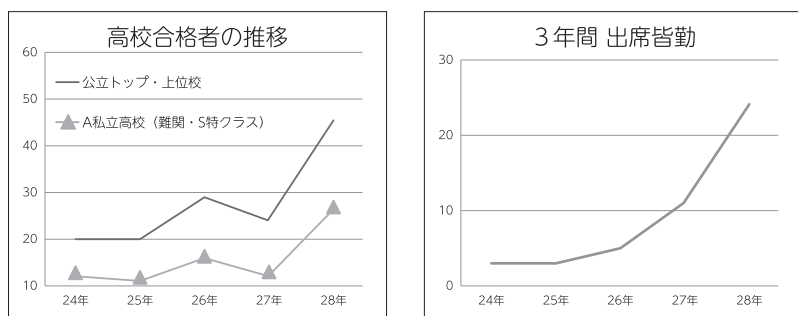


図1 平成24年～平成28年のA校の高校合格者数と出席皆勤状況の推移

では、公立学校ではない、自主性・自立性・特色のある学校づくりを目指すA校は、どのような教育目標と目指す生徒像を掲げ、「体験学習（総合学習）」を中核としたカリキュラム・マネジメントをいかに実現し、在校生の学力の向上および人間力の向上を図っているだろうか。

A校のカリキュラム・マネジメントの実態を明らかにするために、筆者は平成29年6月27日にA校会議室にて副校長へのインタビュー調査を実施した。インタビュー調査の時間は2時間である。以下、A校の①教科横断的な視点で組み立てた「体験学習」の実際、②教職員等の組織体制づくりの2点に着目し、A校副校長へのインタビュー調査のデータおよびA校資料を用いて、分析を行う。

4. 教科横断的な視点で組み立てた「体験学習」の実際

A校は平成12年私立学校として開校し、「人生はいつも新しき挑戦の連続として未見の私の発見の旅」という教育理念があり、当時は中高一貫校であった。平成22年、学校改革により、上記の教育理念の下、新しい教育目標と目指す生徒像(表1)が制定され、中学校は新しい船出を迎えた(高校自由選択制)。平成29年現在、生徒数は251名であり、1～3学年はそれぞれ3クラスで構成されている。教職員数は35人で、そのうち、校長1名、副校長1名、教諭19名、常勤講師2名、非常勤講師7名、事務職員5名となっている。

表1 A校の教育目標・方針及び目指す生徒像

教育目標	<input type="radio"/> 知・徳・体の調和のとれた生徒を育成する。 <input type="radio"/> 個性や能力に基づいた進路希望を実現する。
教育方針	<input type="radio"/> 教育活動全体を通じて、良き市民たるにふさわしい社会性を育てるとともに、豊富な体験型学習により、個性豊かな人間性の涵養に努める。 <input type="radio"/> 基礎的な学力を習得させるとともに、思考力・判断力・表現力・発表力を含めた確かな学力を培う。その成果に立って、進むべき道を自ら自由に選択・決定する。
目指す生徒像	<input type="radio"/> 志を高く持ち、意欲をもって学習に取り組む生徒。 <input type="radio"/> 優しさと思いやりの心をもって、積極的に行動する生徒。 <input type="radio"/> 自らに厳しく、責任感をもって、たくましく活動する生徒。

上記の目指す生徒像の追求、教育目標の実現のため、教育方針で示す通り、A校は「豊富な体験型学習」と「基礎的な学力、思考力・判断力・表現力・発表力を含めた確かな学力」を両立している教育課程を組んでいる。

まず、上記の教育目標を達成するために、深く学ぶことが大事とされ、図2の通り、A校の教育課程の編成時、英語・国語・数学をはじめ5教科の授業時間を、学習指導要領の定める標準時間と比べ、大幅に増やしている。また、各学年の週授業時数は表2の通りである。

上記の授業時数の確保のため、A校は隔週土曜日に授業を実施している。そして、A校は学力を人間力の一環として位置付け、総合的に伸張を図るという

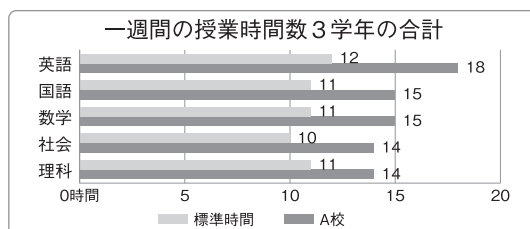


図2 A校の一週間の授業時数と学習指導要領との比較

表2 教科等の週時数

年次	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健	家庭	英語	英会話	道徳	特活	総合	合計
1年	5	4	5	5	2	2	3	1	5	1	1	1	1	36
2年	5	5	6	4	2	1	3	1	5	1	1	1	1	36
3年	5	5	5	5	2	1	3	1	5	1	1	1	1	36

『平成29年度 新入生のしおり』を参照し、筆者が作成。

考えの下、各教科の時数の増加だけではなく、平成29年度より、ACT と PET に取り組むようになっている（表3）。

表3 ACT と PET

ACT<定期考査で実施>	PET<各学期末に実施>
国語…一定の文章を聞き、その要旨をまとめ、自分の意見をまとめる。 英語…ネイティブと会話する。 数学…思考の過程を論理的に表現する。 社会・理科…資料・実験を読み取り、レポートを作成する。	主に社会・理科・英語で100問テストの形で実施します。覚えきれていない積み残し分は、長期休暇の宿題となります。

『平成29年度 新入生のしおり』を参照し、筆者が作成。

表3の通り、ACT と PET は各教科の評価システムの一環であり、生徒のより高い入試突破力を身につけさせることを目的としている。A 副校長によれば、それを通じて、生徒の学力をアップさせるだけではなく、生徒の実態をより把握することができ、教科内容・教員の指導の改善にもつながる。

教科のみではなく、A 校の教育課程のもう一つの特徴は「体験学習」の充実

化である。A校副校長によれば、この「体験学習」は教科横断的視点で組み立てた総合学習という位置づけである。基本的に、土曜日授業の1・2・3・4時間のうち、2時間分は総合学習の時間としている。A校の総合学習の目標は以下の通りである。

さまざまな体験学習をより効果的なものにするために、事前の調べ学習や事後のレポート作成などに取り組みます。体験・学習発表の準備や、校長面接のための自己分析・エントリーシート作成などの時間にも使います。机の上の時間にも使います。机の上の学習だけでは得られない体験を通じて、想像力・思考力・表現力を育みながら、「未見の我」の発見に努めます。

上記の目標の実現のため、A校は多様な体験学習の内容を設けている。例えば、A校が実施している特徴的な内容として表4の「ことばとプレゼンテーション」、表5の「こころ color の体験学習」が挙げられる。

副校長によれば、表4の下線部が総合学習の内容となっている。「ことばとプレゼンテーション」は国語、英語の授業とつながりを持たせた教科横断的な視点で組み立てられていることがわかる。

また、表5の体験学習の設定も生徒の生きる力の育成のためであり、例えば、1年生・2年生対象の「心肺蘇生教室」を通して、命の大切さの理解、思いやりの心の養いにつながり、道德教育の意味を持つものともなる。「古都探訪教室」の場合は、2年生が2泊3日で京都・奈良に行く際、特に2日目・3日目の京都は1日半の行程を生徒自身に作らせる。また、社会科の授業で上記の内容とのつながりで「ここはこういう歴史があり、ここはこんながあるよ」と、興味を持ったところを生徒に調べてもらうという。さらに、調べた内容はA3紙にまとめ、文化発表会の時に展示する。また、「ぐるっと〇〇海湾～昔と現在～20km」においては、山登りしたり町歩きしたりという遠足ではあるが、ただの遠足にするのではなく、「これにテーマを持って、例えば、町の由来と

表4 ことばとプレゼンテーション

日本語を磨き、英語力をのばす、その活動がプレゼンテーションの場に結びつきます。	
<p>日本語力を高める学習 ブラチナ10（朝の読書）</p> <p>自分の読みたい本を、毎朝10分間、集中して読みます。短い時間でも、毎日積み重ねれば相当な読書量となります。書物からさまざまな「ことば」を得たり、まだ見ぬ世界に出会ったり。読書の習慣が、語彙力と想像力を育てます。</p> <p>のはらうた・見えないだけ・百人一首</p> <p>国語の授業を発展させて1年では「のはらうた」、2年では「見えないだけ」の詩を作ります。想像力を豊かにし、創造と表現の楽しさ難しさを学びます。また、古都探訪教室では、旅行の感動を和歌に託し「百人一首」を編みます。互いの個性を認め合う場ともなります。</p> <p><u>夏休み体験発表 1年</u></p> <p>体験学習や思い出に残る夏休みの体験を800字程度にまとめます。発表することを前提としますから、焦点を絞ること、わかりやすい説明などの工夫がいります。また、発表の時には、声の大きさなどにも気を使わなければいけません。みんなの前で堂々と自分を表現する力もつきます。</p> <p><u>Dream14 2年</u></p> <p>社会人の先輩の話や職業適性検査、市役所訪問などの活動の中でイメージした14歳の今、自分の将来設計をまとめます。自分なりになりたい職業、それになるためのアプローチの方法などを自分の言葉でまとめ、発表します。</p> <p><u>自分発表会 3年</u></p> <p>公立高校入試当日、既に進路が決定している3年生は、趣味や特技、興味があることをまとめたプレゼンテーションを行います。実技・実演等も交えた発表会には、毎年、A私立高校の校長先生や4月から受け持たれる予定の先生等も参観されます。</p>	<p>英語力を高める学習 【EPC】(English Presentation Contest)</p> <p><u>英語暗唱(英語スピーチコンテスト) 1年</u></p> <p>物語を暗唱し発表します。クラスごとに予選を行い、選ばれた代表者は本選大会に進みます。英語で話せることの楽しさや、大勢の人の前で話す緊張を乗り越え、英語を話す達成感などを体験します。</p> <p><u>スキット 2年</u></p> <p>昔話などの英語劇に取り組みます。言葉に身振り・手振りを加え、より積極的に英語でコミュニケーションができることを目指します。3年次の海外体験教室で、外国の方と話すときに自分を表現することへつなげていきます。</p> <p><u>セルフイントロダクション(SI)・海外体験教室 3年</u></p> <p>中学3年の10月には海外体験教室でオーストラリアに行きます。ホストファミリーに英語で挨拶できるように、SIプロジェクトに取り組みます。まず自分の家族の紹介、そして郷土や日本文化を紹介します。お土産や写真などを見せて、英語で説明します。SIでの体験を経て、オーストラリアでは自信を持って話せるように英語力を磨いていきます。</p>

『A校 SCHOOL GUIDE 2018』を参照し、筆者が作成。

表5 こころ color の体験学習

学年	内容			
	命の尊さを学び合う AED 講習会	友との絆を深める宿泊研修	心身の鍛錬、自然と歴史に触れる○○ウィーク	未見の我を発見するキャリアガイダンス
1 年	心肺蘇生教室	自然体験教室	○○連山登山 15km	大学体験教室
2 年	心肺蘇生教室のための事前講習	古都探訪教室	ぐるっと○○湾～昔と現在～ 20km	職業体験教室
3 年		海外体験教室	○○街道ウィーク 25km	高校体験教室

『A 校 SCHOOL GUIDE 2018』を参照し、筆者が作成。
なお、A 校の所在地と関連する地名等は「○○」で表示。

か歴史について調べましょう」といった課題を生徒に提示し、社会科の授業での事前事後学習や国語の授業での俳句作りなどで各教科と関連付けながら、多様な学びにつなげている。さらに、「去年の文化祭なんですけど、(歩いたところの風景をもとに) こういうちょっと模型みたいなものを作るとしたら、美術みたいなものともこう関連しながらやる」と副校長は指摘している。

上記の体験学習(総合学習)は、道徳、特別活動、各教科を包括的に捉えることができる。また、副校長によれば、体験活動の内容等によって授業時間についても、流動的であるという(基本的に隔週土曜日2時間)。

A 校が実施した在校生のアンケート調査からは、A 校の魅力の一つとしてあげられたのは「学校行事がたくさんあっていろいろなことを体験できるところ」であり、また「一年生の自然体験教室がきっかけで挨拶ができるようになった」と、生徒自身が成長を認識する機会となっていることがわかる。一方、多様な体験学習があり、「行事が多い中、勉強すること」が大変に感じる生徒もいる。

このように、A 校の体験学習は充実しており、生徒から一定の評価を得ている。一方、副校長は「公立の学校さんもそうかなと思うんですけど、やっぱり教科の授業の中で『他の教科と組みましょう』とかいうのは簡単じゃないですね。やっぱり国語の先生は国語の授業でかかりっきりになるので、『じゃあ、理科の先生とコラボして』とかいうと、どう時間を生み出すかとか、また、教

科書をやっぱり終わらせないといけないという大きなテーマがあるから、実際問題としては難しいだろうな」と教科横断的な視点で組み立てた時の大変さも指摘している。

5 . 教職員等の組織体制づくり

上記の体験学習は主担任教員が存在せず、各学年の教員の分担によって行われている。これは特定の教員に任されることで体験学習に対して関心が低下することを防ぐ方策であると言える。

このような教員配置の工夫は様々な点でみられる。一般的な私立学校と同様に、A校では教職員の構成があまり変わらない。教職員の多くは異動がないために同僚間で長く付き合うことになり、これに伴い教職員同士はある程度意思疎通がしやすいメリットがあるが、副校長によれば、一方、教職員組織を固定化してしまう傾向がある。教職員組織を活性化するため、A校では学級担任を配置する際、毎年、違う学年のクラスを持たせるようにしている。例えば、一年A組の担任である教員が、二年にあがる時に同じ学級の担任となるわけではない。その教員はかわりに別の学年の別の学級を担任として持つことになる。

また、教科の固定化を解消し、教職員同士の情報交換・共有を図るために、教員が全学年の授業を持つよう工夫している。教員は一つの学年の授業を複数持つことが多いが、A校では三つの学年のそれぞれ一学級の授業を持つこととしている。これにより教員は同じ授業ができず、同じテストを作れず、同学年のクラスの間での進捗状況の差をなくすために、教員同士でつねに打ち合わせ等を通して、進捗状況の報告や情報交換・共有をしなければならなくなる。

副校長によれば、この教職員組織改革は6年前からスタートしたという。その背景には、保護者による特定の教員の授業に対する改善要望があり、また、すべての教員が三年生と必ず関わることの効果があるという。すなわち、どの教員も必ず高校受験を控えている三年生と関わるとなると、最先端の情報を必

然的に持たなければならなくなる。改革当時は負担の増大のため不満もあったが、校長、副校長等が改革の必要性を述べることで教職員の意識変化につながったという。このように、6年前から教員の組織を毎年シャッフルしながらやるという形を取ることで、先述した保護者からの指摘はなくなり、保護者や生徒を対象としたアンケート調査にも特定の教員の授業に対する指摘がなくなり、また当初不満を持った教員たちも積極的に取り組むようになり、教員間のコミュニケーション、情報共有により、教員同士による資質・能力の向上にもつながったという。

このうえで、A校は明確の目標の設定をした。すなわち、県が作った偏差値に合わせて、高校の合格者数、公立トップ・上位校への合格者数などの具体的な数値目標を設定した。また、教員の授業力をアップさせるために、副校長が研修部長となり、研究授業の実施、授業見学の実施などに取り組んだ。近年ではICT化を進めており、タブレットや電子黒板を使用した授業研究を行っている。

今年A校が新入生保護者を対象に実施したアンケート調査では、「うちの学校を選んだ、どういうところに魅力がありますか」という質問項目(20個の選択肢で複数選択可)に対して、半分以上の保護者が「先生が熱心に指導をしている」という回答を選択している。教職員組織改革が教員の意識改革につながり、それによってもたらされた教員の熱心さが保護者からの評価につながっている。

ここでは、もう一つのA校の教職員組織の特徴を述べておく。それは、教職員室の整備・工夫である。

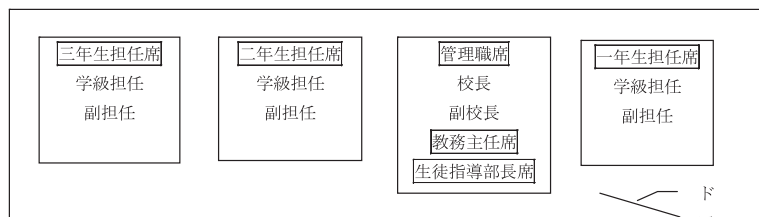


図3 A校の教職員室のイメージ図（改革後）

上の図は教職員室の配置図であるが、これは4年前に変更したものであるという。それまでは、縦長型で、教員たちは対面式で座っていた。また、管理職席は一番奥にあった。副校長によれば、従来の教職員室の席配置では管理職席と教員席と距離があり、教員同士の話が伝わってこないことがあったという。4年前から管理職席を真ん中に移動し、「なんか、こんなことで困っているな」とか、「ああ、こういう情報交換しているな、というのが聞こえてくる」、「何かある時は、ちょっと悪いですけど口挟ませてもらうこともあれば、まあ聞いている時もある。ただ、こういうふうな形にすることで、職員、まあ先生方がどんなことに今困っているとか、課題を持っているかとかいうのを集めるようにできるかな」と副校長がいう。このように、新しい座席の配置により教員間の情報や課題などが迅速に管理職へと伝わるメリットが出てくる。また、教職員室に相談しにくる一年生が多いため、一年生担任席は一番入り口の近くに配置している。教務主任席、生徒指導部長席は管理職席の近くに設置することなど、学校運営等の会議、また小さな打ち合わせでもしやすいというメリットがある。

以上のように、新しい教職員室の席配置により、管理職と主任等の学校運営に関する情報共有、管理職と教員間のコミュニケーション、情報の共有、学年ごとの情報交換が従前より活性化していることがわかる。また、前述したように、教科の教員が学年に所属しながらも、ほかの学年の授業も担当しているため、学年間のつながりも教科等を通してできていることが推測できる。

6 . 結び

本稿は①総合学習を中核としたカリキュラム・マネジメントの実際、②そのための教職員組織の体制づくりの2点を中心に、A校の状況を述べた。以下、A校のカリキュラム・マネジメントの実態をまとめ、さらに課題を提示する。

平成29年3月に制定された「中学校学習指導要領」において、「各学校においては、生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと(以下「カリキュラム・マネジメント」という。)に努めるものとする」と示しているが、本研究はA校を事例として、そのカリキュラム・マネジメントの実態を明らかにした。

まず、A校は、「知・徳・体の調和のとれた生徒を育成する」こと、「個性や能力に基づいた進路希望を実現する」ことを学校の教育目標とした。その目標の実現のため、教育課程の編成時、「体験学習」と「高校受験」と二つの柱で生徒の「人間力アップを基本に、学力アップ」を図ろうとしている。学力アップのために、5教科の授業時数は学習指導要領の示した授業時数より多く設けており、隔週の土曜日授業の設定などを行っている。また、各教科での学力アップを実現していくために、A校は評価機能を重要視している。ACT、PETといった定期考査の実施を通して生徒の学力を把握し、今後の授業や学習指導の改善につなげている。

一方、人間力アップのために、教科横断的な視点で組み立てた、多様な「体験学習」(総合学習の位置付け)を用意している。「体験学習」の内容からもわかるように、国語、英語、社会、体育といった教科、特別活動、道徳との関係性(横のつながり)が見られる。A校が生徒を対象に実施したアンケートの結果

からも、「体験学習」は一定の評価を受けていることが明らかである。

しかし、「体験学習」の実施後の評価が難しいという課題は指摘しておくべきだろう。つまり、生徒が身につけている力をどう評価するかという点にある。現段階において、生徒が体験を通じて感じたものをまとめさせたり、成果物の作成をさせたりし、場合によって、文化祭といった学校行事で、生徒の成長、力をみせる場を提供していることにとどめているが、評価の曖昧さによって、次の改善に結びつきにくい可能性が出る。

次に、教育課程を編成・実施・評価・改善していくためには、校長のビジョンの明確化、そして、教職員間のビジョンの共有が重要とされるが、A校の場合、教職員組織の体制づくり改革が行われ、人的な体制の確保を図ろうとしている。私立学校にある教職員組織の固定化の問題に対して、教員は担当教科を三つの学年で教えることを原則とし、該当教員のすべての学年の状況を把握させている。また、教職員室の座席配置の工夫により、教員間、教員と管理職間のコミュニケーションを取りやすくし、情報共有・意思疎通を通して、校長のビジョンの共有化が図られたという。先述したように、6年前から教職員組織体制改革が行われたが、現在、入学者の保護者等からは教員へ高い評価が得られている。

以上のように、A校のカリキュラム・マネジメントにより、今年の卒業生の名門高校への合格数の増加（学力アップ）、在校生の皆勤率の向上（よい生活習慣づくり）といった効果が現れている。

本稿はA校の総合学習の位置付けである「体験学習」に着目し、教科横断的視点で組み立てた総合学習の実態を明らかにした。また、これを中核としたA校のカリキュラム・マネジメントの実態を解明した。この中で「体験学習」の効果が上がっており、生徒の学びを深めている一方、評価の難しさという課題も存在することを指摘しなければならない。今後、総合学習の評価の在り方を検討することを課題としたい。

また、本研究はA校という一事例であるため、知見の一般化が難しい。さら

に事例を増やし、カリキュラム・マネジメント成功の鍵を明らかにしていきたい。

註

(1) A市『教育調査統計資料 No.65』2017年、p.1。

【参考文献・資料】

- ・ A校『平成29年度 生徒便覧』2017年。
- ・ A校『平成29年度 新入生のしおり』2017年。
- ・ A校「オープンスクール学校説明会資料」2017年。
- ・ 天笠茂『カリキュラムを基盤とする学校経営』ぎょうせい、2013年。
- ・ 教育課程部会教育課程企画特別部会「教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）」(2015年8月26日) http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2015/12/11/1361110.pdf (最終アクセス日: 2017年11月25日)
- ・ 中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について」(2006年7月11日) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm (最終アクセス日: 2017年11月25日)
- ・ 中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」(2015年12月21日) http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2016/01/13/1365896_01.pdf (最終アクセス日: 2017年11月25日)
- ・ 中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」(2016年12月21日) http://www.mext.go.jp/b_menu/sh-ingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afiedfile/2017/01/10/1380902_0.pdf (最終アクセス日: 2017年11月25日)
- ・ 中留武昭・曾我悦子『カリキュラムマネジメントの新たな挑戦 - 総合的な学習における連関性と協調性に焦点をあてて -』教育開発研究所、2015年。
- ・ 楊川「教職課程科目における総合的な学習の時間の指導方法に関する研究 カリキュラム・マネジメントの視点から」九州国際大学教養学会『教養研究』第23巻第3号、2017年3月、pp.65-85。

〔付記〕

本稿は公益財団法人ヒロセ国際奨学財団、平成27年度研究助成金「学校管理職の力量形成と専門性の向上に関する実証的研究」の成果の一部である。

A Study on Curriculum Management with a Central Focus on the Period for Integrated Study:

An Examination of Curriculum Guidelines and a Case Study

Chuan Yang

This study aims to clarify the actual state of curriculum management through a case study of a junior high school. First, the author examined contents of curriculum guidelines, clarified the definition of curriculum management and its importance, and confirmed its association with the period for integrated study. Then the author conducted interviews with the school's vice-principal and disclosed the actual situation of the present curriculum management in the school; the school increased its lesson hours, offered students a variety of on-site trainings in various subjects, and sought to maximize students' academic ability and humanity by introducing field works as an integrated study. Furthermore, the author examined the uniqueness of the organizational management system of the school and its effects; the system enabled easier communication among teachers, and led to higher educational effects. The author concludes this study by indicating the necessity of establishing objective evaluation criteria of integrated studies.